

研究プロジェクト総合報告  
研究プロジェクト論文

## 大学1年次生の英語学習方略における全体的傾向

<sup>1</sup>今井 由美子      <sup>1</sup>若本 夏美

<sup>1</sup>同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・教授

## Overall Trends in English Learning Strategies of First-Year College Students

<sup>1</sup>IMAI Yumiko      <sup>1</sup>WAKAMOTO Natsumi

<sup>1</sup>Department of English, Faculty of Culture and Representation,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

### Abstract

This study analyzed the overall trends in the six categories of first-year college students' English learning strategies. The participants were 1200 students of 11 departments (981 non-English-major students and 219 English-major students). The median of all six categories was below the midpoint (2.5), meaning that the students were reluctant to learn English. While the participants' median values for memory strategies, communication strategies, and socio/affective strategies were relatively high, their median values for cognitive strategies, metacognitive strategies, and ICT strategies were relatively low.

### 1 研究の背景

本学は2020年現在、文系・理系を含む6学部11学科をもつ大学である。国際教養学科および英語英文学科以外の全学部生が履修する共通英語教育のあり方を新たに構築すべく、研究プロジェクトの一つとして英語学習の情意面（学習動機・不安等）に関する調査「英語学習方法についての調査用紙」を1200人の調査協力のもと実施する機会を得た。英語学習方法について調査することは、英語学習に成功した学習者がもつその秘訣だけでなく、成功につなげることが困難な学習者が抱える問題点をも知る機会になる。

### 2 先行研究

飯田ら（2018）は大学1年次生の英語学習方略について質問紙調査を行い、英語非専攻群（9学科981名）と英語専攻群（2学科219名）の1200名を協力者とした大規模な調査を行なった。結果は7種類のカテゴリー（記憶方略、認知方略、コミュニケーション方略、メタ認知方略、情意方略、社会的方略、ICT方略）において、英語非専攻群および英語専攻群のストラテジー使用の平均値が全て基準の2.5を下回った。このことから、全学科1年次生の傾向として、英語学習に消極的であり自ら英語学習に取り組も

うとする姿勢に欠けていることが明らかになった。

飯田ら(2020)は、1年間の大学における英語学習を振り返る形式で質問紙調査を行い、大学1年次生の英語学習に対する動機について国際教養学科1年次生(78名)と看護学科1年次生(87名)を比較した。質問紙は3部構成で、第1部は13のカテゴリー(①英語学習の目的・努力、②理想自己、③義務自己、④文化に対する関心、⑤道具的回避、⑥道具的接近、⑦L2コミュニティへの態度、⑧統合性、⑨自信・不安、⑩家族社会的要因、⑪英語学習に対する態度、⑫コミュニケーションへの意図、⑬自己効力感)52項目について尋ねた。第2部は、学生の大学における英語教育に対する要望を自由記述形式で尋ねた。第3部は小学校から大学1年までの英語学習動機の変化に関する質問であった。第2部の結果から、大学における英語教育に対し、看護学科生から4つ(「英語学習の意義と目的の明確化」「コミュニケーションのための英語学習」「英語学習継続のための助言」「大学での英語学習のあり方」)、また国際教養学科生から1つ(「実用的・実践的な英語使用の機会」)の要望があることが明らかになった。また、第3部の結果から、両学科共に学生は、高校から大学までの学習意欲よりも小学校から高校までの学習意欲の方が高い状態を維持していたことも明らかになった。大学入学後、国際教養学科生にとっては引き続き英語学習への積極的姿勢は維持されるものの、より真剣に取り組む学生にとっては留学に必要な試験の結果が英語学習動機に影響を与えることもある。看護学科生にとっては、受験科目としての英語という位置づけから異文化理解や「使うための英語」という視点からの英語学習が必要になる。学生にとって、専攻による差こそあれ大学での英語教育における動機付けの重要性を示唆した。

### 3 研究目的とその方法

本研究の目的は、飯田ら(2018)が1200名の全学科1年次生(英語非専攻群:11学科981名

と英語専攻群:2学科219名)を協力者として実施した英語学習方略についての質問紙調査で得られた結果(全カテゴリーにおいてストラテジー使用の平均値が全て基準の2.5を下回った)を、さらに6つのカテゴリー(記憶方略、認知方略、コミュニケーション方略、メタ認知方略、情意・社会的方略、ICT方略)においてヒストグラムを作成しその傾向を分析することである。質問紙には4件法のリッカート・スケール(1:全然していない~4:よくしている)を採用した。ヒストグラムにおける縦軸は回答者数、横軸は4件法の「1」から「4」を表し、基準となる中間点は2.5である。6つのカテゴリーにおける回答平均値が中間点の2.5を上回る方略群は頻繁に使用されているストラテジー、2.5を下回る方略群は使用頻度の低いストラテジーとされる。ただし、協力者1200名の内訳は英語非専攻群981名(82%)および英語専攻群219名(18%)で、協力者数において英語非専攻群が英語専攻群の約4倍であることを念頭におき結果を見る必要がある(4で述べる結果において、全ての方略において中間点より「4」よりの分布に同じ傾向が見られるのは、英語専攻群の回答の結果が反映されている可能性が高い)。

## 4 結果と考察

### 4.1 記憶方略

図1は英語学習における記憶方略(単語やイディオムを覚えそれらを活用すること)の使用頻度を示したものである。「1」から中間点までの分布が多く、記憶方略の使用頻度が低いことがわかる。中間点から「4」に向かったの分布がほとんど見られない。記憶方略を用いた英語学習を日常的に行っていないことを表す。

### 4.2 認知方略

図2は英語学習における認知方略(実際に英語を使うこと)の使用頻度を示したものである。中間点から「1」に向かい分布が集中し、「4」に向かい度数の伸びがない。日常的に英語を使用していない、使用する機会がないことを示す。

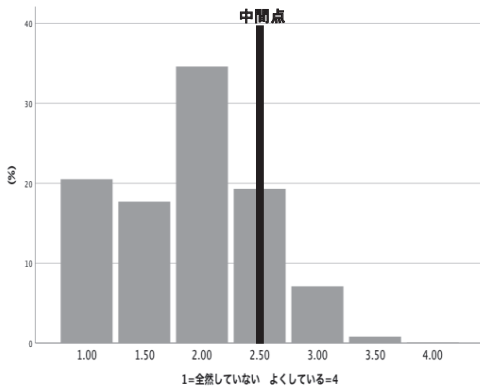


図1 記憶方略（全学科）

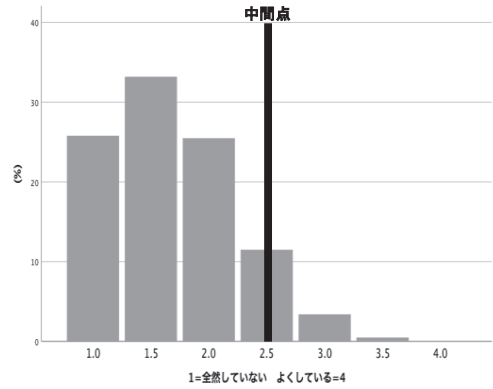


図2 認知方略（全学科）

### 4.3 コミュニケーション方略

図3は英語学習におけるコミュニケーション方略（英語を使用している最中に行っている工夫）の使用頻度を示したものである。中間点から「1」への分布が多く、中間点からやや右寄りではあるが山型を形成している。そもそも英語を使用する機会が日常的にない環境にいなながらも、仮に英語を使用する機会があればこのようにするだろうという姿勢の表れだと推測する。英語専攻群にとっては、大学での授業で英語を使用する機会が増えているので、実際に行っていることを意識し回答しているといえる。

### 4.4 メタ認知方略

図4は英語学習におけるメタ認知方略（自分自身の学習状況を判断し必要なことを見極め学習に活かすこと）の使用頻度を示したものである。ここでは「1」の度数が最も多いのが特徴的である。英語学習におけるメタ認知方略を日常的に使用していないことが明らかである。英語学習をする機会がなければ英語学習について工夫することもないということであろう。英語非専攻群の大きさの特徴が最も明確に表われたといえる。

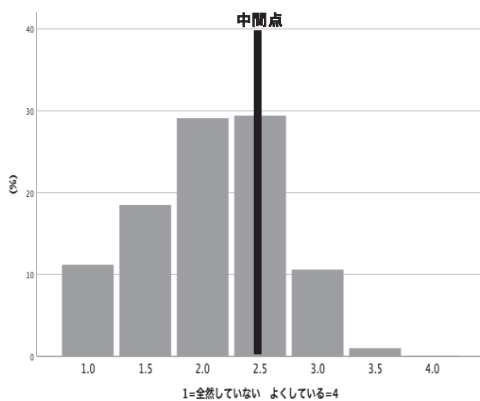


図3 コミュニケーション方略（全学科）

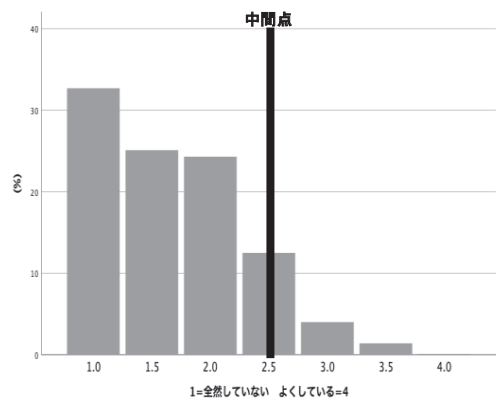


図4 メタ認知方略（全学科）

### 4.5 情意・社会的方略

図5は英語学習における情意・社会的方略(英語学習における他者との積極的関わり)の使用頻度を示したものである。ここでも中間点の左側に分布の多くが集中している。コミュニケーション方略と同様に、英語学習における情意・社会的方略を日常的に使用していないことを示していること、もし英語を使用する機会があればそのようにするだろうという想像による回答が含まれているといえよう。英語専攻群においては、授業における実践の場で活用していることの現れだと推測する。

### 4.6 ICT 方略

図6は英語学習におけるICT方略(英語学習におけるICTの活用)の使用頻度を示したものである。「1」の度数が最も多い特徴がICT方略においても確認された。調査協力者の50%近くが英語学習のためにICTを「全然(活用)していない」のである。

### 4.7 英語学習方略における全体的傾向

図7は6つのカテゴリにおける英語学習方略についての回答データ分布をまとめた箱ひげ図である。飯田ら(2018)で示したように、6

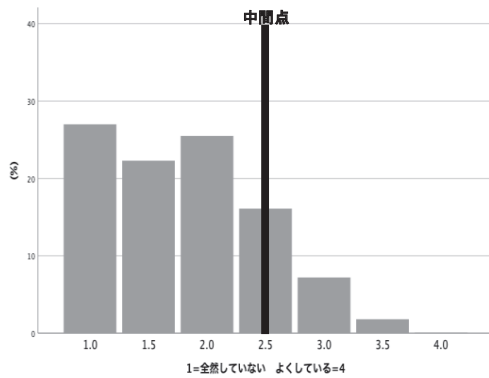


図5 情意・社会的方略(全学科)

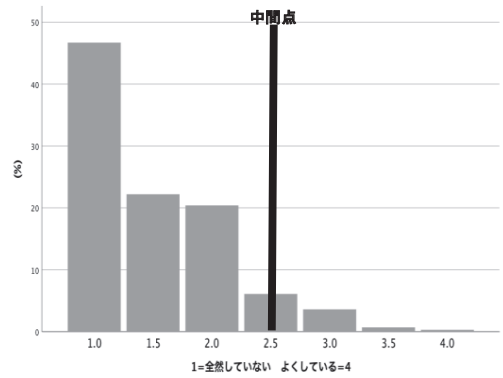


図6 ICT方略(全学科)

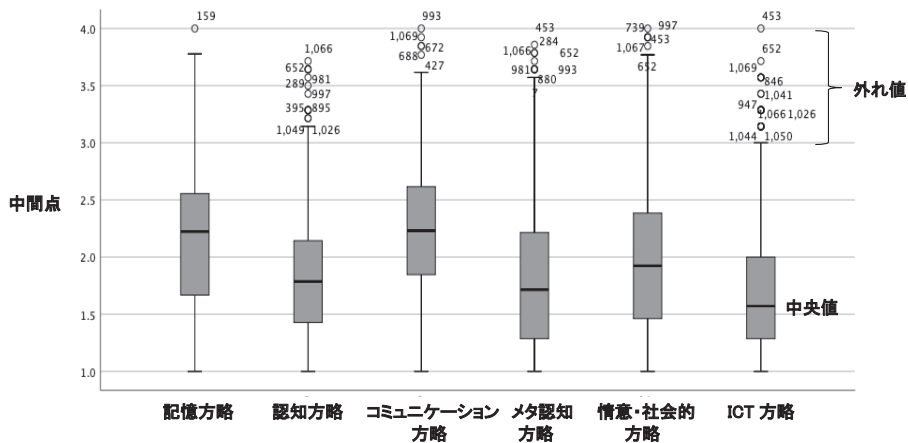


図7 6つのカテゴリにおける英語学習方略データ分布比較

つのカテゴリーにおける中央値は全て中間点(2.5)を下回る。しかしながら、英語学習に消極的姿勢でありながらも記憶方略、コミュニケーション方略、情意・社会的方略における中央値が比較的高い。これは多くの学生が、記憶方略においては受験を含むこれまでの英語学習において語彙や文法を覚えることを中心に学習してきたこと、英語学習自体には積極的に取り組むことが困難だが「もし機会があれば」これまでに身につけてきた英語力を駆使し英語を使ってみたい、あるいは「このように」英語を使わなければならない状況で工夫したいという気持ちだが、これら3つの方略の中央値を押し上げていると考える。一方で認知方略、メタ認知方略、ICT方略における中央値が低い傾向にある。英語を実生活で使用する機会がない環境にあること、英語力向上のために必要な学習方法がわかっていないこと、特に英語学習においてICT活用がなされていないことが大学1年次生の特徴である。インターネットやSNSなど生活におけるICTは必須であるが、英語学習を目的とした活用には活かされていない。なお、各カテゴリー上部に外れ値が見られるが、これは英語専攻群・英語非専攻群に限らず英語学習方略に対する積極的姿勢の強い回答者が存在することを示している。

## 5 今後への示唆

本研究の目的は、大学1年次生の英語学習方略について6つのカテゴリー(記憶方略、認知方略、コミュニケーション方略、メタ認知方略、情意・社会的方略、ICT方略)における傾向を分析することであった。結果として、本学1年次生は全てのカテゴリーの英語学習方略を使用しておらず、特に認知方略、メタ認知方略、ICT方略においてはより低い結果となった。このような現状において大学は何をすべきか。

飯田ら(2020)は大学における英語教育に対し、看護学科生から4つ(「英語学習の意義と目的の明確化」「コミュニケーションのための英語学習」「英語学習継続のための助言」「大学での英語学習のあり方」)、また国際教養学科生から1つ(「実用的・実践的な英語使用の機会」)の要望があることを報告した。この結果と本研究で得た結果を合わせ考えるに、これまでの受験英語と異なる大学での英語学習では、英語学習における「次の目的」を学生に対して明確にすることが重要である。そして学生の興味や関心を引きつけるために、これまでの英語教育では体験することが困難であった「使う英語」を実現するコミュニケーションのための機会提供および環境設備が期待される。また、両キャンパスに英語専攻の学生がおり、英語学習においてその「成功者」と評価できる学習者が存在することから、自らの英語学習法や成功体験を紹介することで、学生同士の刺激的学習交流の可能性も期待できると考える。大学生ならではの理想自己の達成感や自己効力感を高めるために「英語×知性・教養」をキーワードとして、本学らしい英語教育理念および方針の構築が期待される。

## 参考文献

- 飯田毅・成橋和正・橋本秀実・今井由美子・佐伯林規江・高橋玲・若本夏美・松中みどり(2018)。「本学の教育理念及びVision 150を活かした共通英語教育開発のための基礎研究—1年目のまとめと考察—」同志社女子大学総合文化研究所紀要第35巻, 45-81.
- 飯田毅・成橋和正・橋本秀実・佐伯林規江・今井由美子・高橋玲・若本夏美(2020)。「本学大学1年次生の英語学習に対する動機—国際教養学科と看護学科との比較を通して—」同志社女子大学総合文化研究所紀要第37巻, 1-20.